

昭和二十三年

(一四〇)

合掌 御便り有難う。あの御名号が東京に君と共に御上りなされたこと嬉しく存じます。

如何に如来世尊の招喚発遣ありとも、回心を媒介とせずば信證せしめられること能わざることを想ふ時、君の御念仏の現在を尊く想ひます。

牟礼から御正忌にも亦来会者あり、或は支部発足も可能かと喜んでいます。御体御大事に。

昭和二十三年一月十一日

脇質様

夜晃

(一四一)

合掌 先日は御手紙有難う御座いました。十二月には大変お世話になりました。幹部のお骨折で無事にすみまして有難う存じます。承わりませばこの度、武子様は良縁あつて御結婚なさいますとのこと御芽出度う御座います。もうそんなになられたかと今更の如くおどろきました。悲しくてもさびしくても女の子は夫の家に帰る子です。皆宿業を負うて歩むのです。どうか武子さんお念仏申して生き貫いて下さい。

吉木とか聞きましたと同じ吉坂でも吉木は法の衰えたところでは。今吉田や阿坂に近いところならいいがと心配しています。武子さん同封を持って行って下さい。これは「慎終如始」「終を慎むこと始の如くす」と言うこと、第一に御念仏、朝晩の礼拝、両親への挨拶等、はじめにやり出したことは終わりまで貫くことです。これを一生の守本尊にして下さい。念仏してゆけばどこでも有難く生きられます。そして年に一度は必ず本部に出して頂きなさい。皆様御心配でしょう。何もかも御念仏して取行わせて頂きましょう。

先は御芳志有難く厚く御礼申し上げます。この前お母さんが見えませんでした。御元氣ですか。よろしく御伝え下さい。

昭和二十三年一月二十二日

住岡夜晃

佐々木定様 玉子様 武子様

(一四二)

合掌 長らく御沙汰致しました。この節は御元気なんでしょうか。この度は又も御珍らしい高島海苔沢山御贈り下さいまして有難う御座います。殊の外の好物喜んで頂きます。厚く御礼申し上げます。近頃島根からはさつぱり本部に出てくれないようになりました。鎌手支部もなかくです。四月には又どこかで会えましょう。御念仏一つに生ききつて下さい。先はお礼迄、早々

昭和二十三年一月二十九日

住岡夜晃

三浦恒代様

(一四三)

合掌 南無阿弥陀仏 その後いよくお念仏一道に御精進の御事とお察し致します。さて承りませばこの度御主人様には、にわかには御病気が重り御往生なさいましたとのこと誠に〜おどろき入りました。おさびしいことで御座いましょう。しかしかねて御念仏を喜んでいられたことでもありますから、定めし有難い御病床であり、尊い御往生であったこととお察し致します。御生前には誠に貴女はよくしておあげなさいました。さぞかし貴女に対して大きな感謝の中に御往生なさったこと、存じます。ようしてあげなさいました。今ははや久遠劫来の宿業をはたしてみ親のもとに大涅槃のさとりを得て、今度は後に残った私たちを護つて下さることでもあります。この点ばかりは誠によかつた〜と思われます。後に残ったものはいよく念仏一道を精進させて頂きましょう。昨年秋お会いした時の上本さんの御念仏のかほが思われます。御念仏の中に謹んで御悔み申し上げます。南無阿弥陀仏

昭和二十三年二月九日

住岡夜晃

上本八重子様

(一四四)

合掌 この度は、誠にようこそ御来会下さいました。一家すでに三人迄、本部に出られて、御念仏に生きて下さることを誠に嬉しく有難う存じます。猶、青年が、三人、一緒に来て下さったことも、嬉しいことです。仲よく念仏に結ばれて、御精進下さい。皆さまによりしく御伝え下さい。

昭和二十三年二月十五日

住岡夜晃

小田清三様

(一四五)

合掌 御便り有難う。昨夜は土曜会でした。一人の念仏の子、それは誠に高価なものです。「念仏の須磨子」が生れて来るのは容易ではなかった。貴女のおば様が喜んでいられた。一筋、念仏道生ききらせて頂くこと、それだけがある人、それは実にも希有人です。その人に誰がなるのか。これでおきます。

昭和二十三年（不明）月二十七日

住岡夜晃

安永須磨子様

(一四六)

合掌 寛が中原のお祭から帰って来ました。私は風邪の為、山口県によう出ないで床の中にいました。寛から承りますと誠に驚き入りました。たけ子様には御急病にて御往生なさいましたとのこと、何ともかとも申し上げようが御座いません。昨年春四月はじめて中原に帰りました頃、皆が「岩見さんには婚礼前だのに皆よくお参りなさる」と云っていました。講演がすむとすぐ嫁がれたのでした。そんなことで私の頭にはつきり印象されてあります。御産をせられてから御体具合が悪いと聞いておりました。夏の聖会には一日でも本部に御出で下さい。本部の者は岩見先生の御妹さんとして皆知っております。

たけ子様のお母様！ 大変な目にあわれましたね。世の中に子供に先立たれたほどの悲しいつらいことはありません。それも一夜の急病で死なれて何ともかとも出れない御心のほどお察し致します。私も子供に死なれてこの苦悩を知っています。岩見さん、これが生死の苦海です。はてしなき生死の苦海の愛別離苦です。玉子様！ 今ここまで書くと鳥取県の一同朋が私が十一月に行くことを、それはそれは待つていたのが死んだとの知らせ！ あゝ。

玉子様、お祭の喜び、大客が来ていられた中での御騒動、目が見えなくなつてゆかれ、急いで任生される御妹様を見ていられた皆様の御心御察して涙します。一瞬にして厳粛な死の中に誰も彼もつきおとされて御念仏なされたことだと存じます。諸行無常、無常迅速と聞けど、平素は忘れていきます。こうしたことに出会った時、いよ／＼み仏の仰せの真実を知らせて頂きます。申す迄もないことですがたけ子様の御急死が善知識となつて御一家揃つて御念仏の道に御精進下さいませ。決してたけ子様を犬死させぬように、御浄土のたけ子様を中心に御念仏一道に生きぬいて、俱会一処と、やがてお浄土で皆再会させて頂きましょう。皆様が御念仏一つに御精進下さる時、たけ子様は御喜びであります。地上には御念仏申すより外に生きる道のないことがいよいよ明かであります。

十二月の報恩講には御父上も御母上も何とかして御参り下さいませ。御待ち致しています。小さいお子様が可愛想です。どうなさいますやら案じています。長くありませんでしたが右御悔み迄、謹んで申し上げます。南無阿弥陀仏。

昭和二十三年十月十日

住岡夜晃

原支部中原 岩見徳一様 外皆々様

玉子様、先日は御手紙有難う御座います。学校で親のない子には特に気をつけておやりなさい。悲劇の子ですから。

(一四七)

合掌 三度御感想拝誦。御熱意有難し。河内支部講演の一節！ 何故に御聖教を頂くのであるか、それは我が思い、我が喜び、我が悲しみをして歴史のなそれにせんが為である。個の主観が一個の主観的なものであるには違いないが、果して限られた一個の主観はそれにとゞまつていいであろうか。焦燥も不安も、それは個が個の主観的事実を個一個のものと考えるからである。念仏申せども、貪瞋二河は熾盛にして踊躍歡喜なきことを知つて、こゝに疑惑を生じ、念仏を疑い、自己自身を疑うは、個が個の悪を主観的事実となし、明日を待望して主観的事実を善に改造し得て、如来4に対応せんとするのであつて、貪は無貪に、不歡喜は歡喜に改造し得る個の一時的状態、単なる主観的状态とするのである。

然るに浄土教の祖師たち、そして遂に我が聖人は、眩劫己来の無明煩惱宿業のなせるものにして、水火各百歩(年)、個の主観的事実―しかしそれは掘り下げられた―を以て、一切群生海の必然の流転相とせられた。然るにかゝる相を照し出し、疑惑にとゞめをさすものは本願名号であり、絶対救済の光の中に無明煩惱の必然の相を深信する時、はじめて個の主観は歴史的事実となる。「天におどり地におどるほどに喜ぶべきことを喜ばぬにていよく、往生は一定と思いたまうべきなり。」そこには何の疑惑があろう。個の主観は単なる主観ではなくて、普徧の大悲によつて歴史的事実となる。(歴史とは名号なり)

「悲哉愚禿……」「慶哉愚禿……」

「浄土真宗に帰すれども真実の心はありがたし。虚仮不実の我身にて清浄の心もさらになし。」

なしのまんま、悲しき哉のまんま、喜ばしき哉のまんま。希くば日中に日中を求むるの愚をくり返す勿れ。念仏して助かるにはあらず、念仏のまんま助かるのである。内観一片の妄念たりとも大切に思えとは我が常に言うことである。

昭和二十三年十二月三十日夜

夜晃

佐藤虎男様